優秀賞〈高学年の部〉

ぼくの特等席

宮城県　聖ウルスラ学院英智小学校 四年
中村 友馬

つらい事やいやな事があった時、お母さんにぎゅっとされるとなみだがたくさん出てくる。その場所で「大丈夫、大丈夫」と言われると、どんなことでも大丈夫なのだと思えてくる特別な空間だ。ぼくにとってお母さんの胸はとても温かくて、いつもせんたくのいいにおいがする、ずっといたい大好きな場所だった。だけど、当たり前にいつもそこにあるはずのぼくの特等席が当たり前のことではなくなると知った日から、その場所はまほうの力を失ったかのようで、なみだを止めることもできなくなってしまった。

「お母さんのお胸、病気と一緒に手術してこないといけなくなったの。」

お母さんからこの言葉を聞いた時、ぼくは何を言っているのかさっぱりわからなかった。お母さんの胸に病気が見つかり、手術しないと死んでしまう大変な病気だった。お母さんの命の方がずっと大切なはずなのに、ぼくは自分の宝物をうばわれるような気がして何度もいやだと泣いてお母さんを困らせた。それから手術までの一か月間は、悲しい時やつらい時、うれしい時、そして理由がない時も、お母さんに力いっぱいぎゅっと抱きしめてもらった。

コロナウイルス感染防止のため、入院しているお母さんに会いたくても、家族が病院へ入ることはできなかった。手術が無事に終わった話をおばあちゃんから聞いた時、ぼくはどうしてもお母さんに会いたくなった。ぼくはおじいちゃんにお願いして、毎朝学校へ行く前にすごく早起きをしてお母さんの病院へ車で連れていってもらった。病院の中に入れない代わりにうらの歩道からお母さんの居る六階の病室を見上げると、お母さんは病室の窓から顔を出して、手をふってくれた。すごく遠くて顔なんか見えないのに、お母さんがさみしい顔をしているように思えて、なみだが勝手に出てきた。こんなにさみしいのに、お母さんに抱きしめてもらえないのは苦しかった。だから、ぼくはそんな苦しい気持ちをどこかへ吹き飛ばすように、そしてお母さんがぼくを見て元気になれるように力いっぱい手をふった。二週間後に退院して家に帰ってきたお母さんは、前と何も変わっていないように見えたのに、当たり前にあるはずだったぼくの大切な特等席はぼくが入れないほど小さな空間に見えた。もう、前みたいに両手を大きく広げて力いっぱいぎゅっと抱きしめてもらえない代わりに、今度はぼくがお母さんを力いっぱいぎゅっとした。

いつも温かくて世界にたった一つの、ぼくだけの特等席は失ってしまったかもしれない。けれど、それは今も変わらずにぼくの心の記憶に残っている。ぼくだけの特等席を作ってくれてありがとう。これからは、お母さんが安心できる大切な場所をぼくが準備するからね。